報道発表資料

東京消防庁　Tokyo Fire Department

平成２３年１１月８日

今夏の熱中症の発生状況
～当庁の取組結果を踏まえて～

今年の夏は、福島原発事故に伴う電力不足の影響が危惧され、テレビや新聞をはじめとするマスコミにより、かつてないほど熱中症の注意喚起がなされました。当庁でも、毎年熱中症による救急搬送人員が増え始める６月前から、熱中症に対する注意喚起をはじめました。

このたび、６月から９月までに熱中症により救急搬送された人のデータが暫定的にまとまったことから、取組の結果と合わせて今年の熱中症の状況を発表します。

１　熱中症による救急搬送人員は、昨年と比べ減少しました。

２　救急搬送人員が減少した理由としては、昨年の同時期に比べ気温が低かったことによるものが大きいと考えられますが、発生内容に昨年とは違う傾向が見られました。

３　救急搬送された人の年齢層をみると、高齢者層で減少していますが、若年層では増加しています。

４　今年は、スポーツや運動などの最中に多数の人が救急搬送される事案が数多く発生しました。

詳細は、別添え資料を参照してください。

問合せは、生活安全相談ダイヤルと生活相談メールで受け付けます。

日常生活の事故に関するご相談は・・・

生活安全相談ダイヤル

０１２０－２８６－１１９

・開設期間　平成２３年１１月９日（水）から１２月９日（金）まで
・利用時間　平日の午前８時３０分から午後１７時００分まで
・東京都内からおかけの場合に、ご利用いただけます。
・ＩＰ電話（０５０番号）などからは、ご利用いただけません。
・日常生活の事故に関する内容以外は、ご回答できません。

日常生活の事故に関するご相談は・・・

生活安全相談メール

seikatsuanzen@tfd.metro.tokyo.jp

・開設期間　平成２３年１１月９日（水）から１２月９日（金）まで
・２４時間受け付けておりますが、回答は翌日以降となります。
・日常生活の事故に関する内容以外は、ご回答できません。

問合せ先

東京消防庁㈹　電話 3212 - 2111
防災安全課防災安全係　内線 4207
広報課報道係　内線 2345～2349

別添え

今年の熱中症の発生状況について

今年、東京消防庁では毎年熱中症による救急搬送人員[1)]が増え始める６月前から、熱中症に対する注意喚起をはじめました。特に、過去の熱中症の発生状況を分析した結果、気温が２８度を超えると救急搬送人員が急増することがわかったこと、そして、電力不足に伴う節電により、暑いと感じても冷房の使用を控える人が増加することを予測し、「２８度を超えたら熱中症に特に注意！」「高齢者のいる家庭では室温調整に特に注意！」として、ポスター作りや報道発表等の取組を進めてきました。

このたび、６月から９月までに熱中症により救急搬送された人のデータが暫定的にまとまったことから、取組の結果と合わせて今年の熱中症の状況を発表します。

１　熱中症による救急搬送人員の比較

今年は昨年と比べると救急搬送人員は減少した

熱中症による救急搬送人員は、平成２２年中（６月～９月）の４，７８０人と比較し７４０人減少し、４,０４０人でした（図１）。

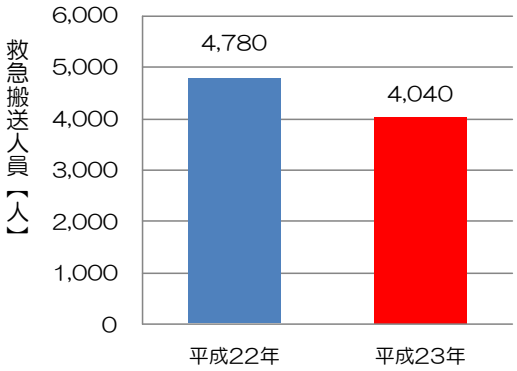

図１　熱中症による救急搬送人員

２　救急搬送人員減少の理由

昨年に比べ、最高気温が２８度を超える日が少なかった

気温の変化と、救急搬送人員の変化をグラフに表すと、今年は昨年に比べ気温の差が激しかったものの、全体的に昨年より最高気温が２８度を超える日が少なかったことがわかります。また、救急搬送人員も気温とともに変化しており、７月下旬、８月下旬の気温の低下の影響が大きいことがわかります（図２）。

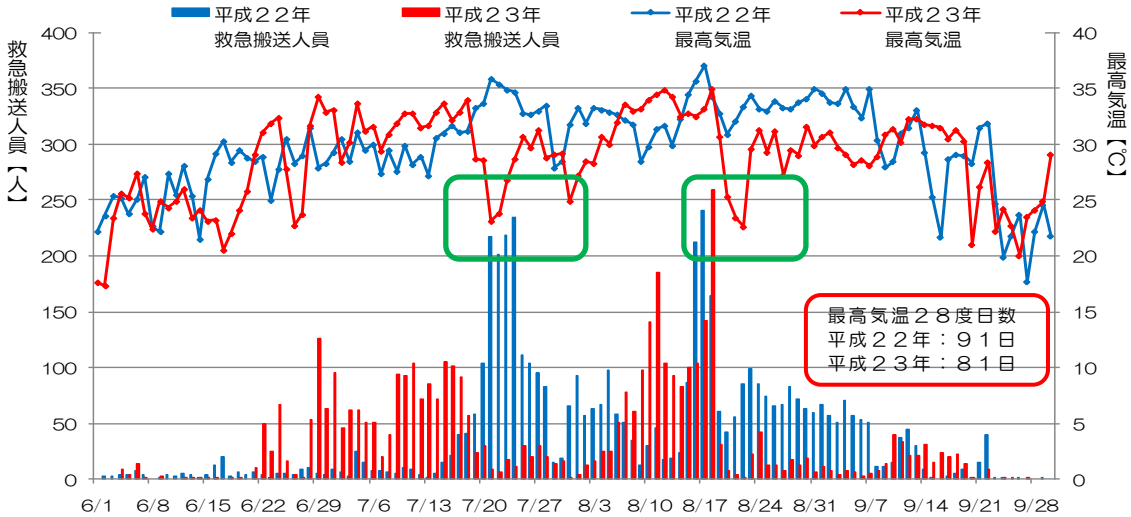

図２　救急搬送人員と最高気温

1)　６月から９月までの間に、熱中症（疑い含む）により救急搬送された人（今年の数値は速報）、以下同じ

３　分析結果

⑴　気温上昇時（２８度以上）、熱中症による救急搬送人員は減少したか

救急要請があった時点での気温[2)]を２８度で区切って、昨年と今年で救急搬送人員を比較すると、２８度を超えていた時間に救急搬送された人は、今年は３,５１７人で、昨年に比べ９１０人減少しています（図３）。また、２８度未満の時間帯では、１７０人増加しました（図４）。

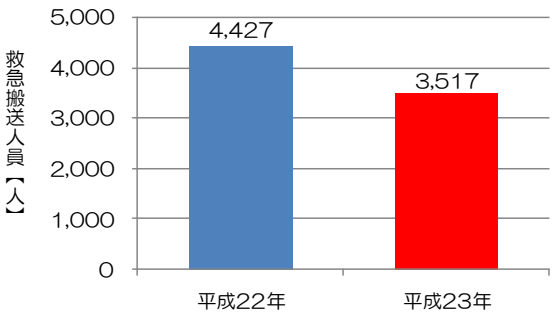

図３　２８度以上の時間帯における救急搬送人員

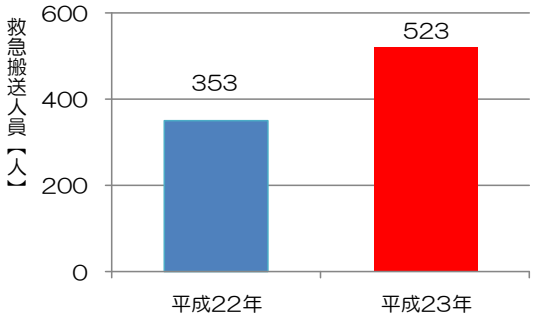

図４　２８度未満の時間帯における救急搬送人員

２８度以上の時間帯における救急搬送人員は減少しましたが、２８度以上を記録した時間自体が、昨年より２６５時間少なくなっています（表１）。そこで、２８度以上を記録した時間における１時間あたりの救急搬送人員を昨年と比較したところ、実は大きな変化がないことがわかりました（図５）。

なお、２８度未満の時間帯でも、昨年は 0.20 人、今年は 0.26人で、こちらも大きな変化はありませんでした。

表１　昨年と今年の気温別の時間

	28度以上の時間	28度未満の時間	合計（24時間×122日）
平成２２年	1,205	1,723	2,928
平成２３年	940	1,988	2,928

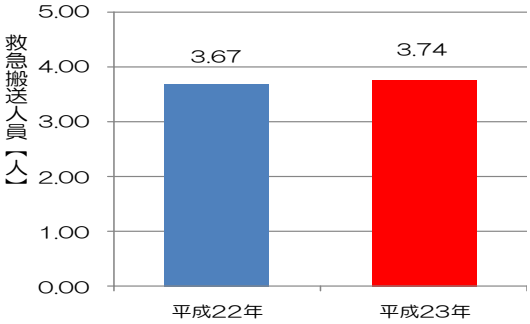

図５　２８度以上の時間帯における１時間あたりの救急搬送人員

結果　２８度以上では、昨年と同じくらいの人が熱中症により、救急搬送された

2)　熱中症による救急要請時点の、気象庁発表による大手町の気温（例：14 時 15 分に要請があった場合は 14 時の気温）

⑵　高齢者の救急搬送人員は減少したか

下の表は、救急搬送人員を年別、年齢層別に分けたものです（表２・図６）。

前２でも述べましたが、熱中症による救急搬送人員は、今年は昨年よりも減少し、前年比率は、８４．５％となっています（表２中①）。

次に、各年齢層において、前年比率が全体よりも高い年齢層は黄色、低い年齢層は青色で塗り分けると、高齢者に青色が多くなっていることがわかります（表２中②）。特に７０歳以上の高齢者では、減少していることがわかります（表２中③）。

表２　年齢層別救急搬送人員の比較

	平成２２年	平成２３年	増減	前年比率
10未満	82	87	5	106.1%
10-19	463	472	9	101.9%
20-29	473	418	-55	88.4%
30-39	487	397	-90	81.5%
40-49	433	380	-53	87.8%
50-59	394	322	-72	81.7%
60-69	574	518	-56	90.2%
70-79	794	636	-158	80.1%
80-	1,080	810	-270	75.0%
合計	4,780	4,040	-740	84.5%

②　③　①

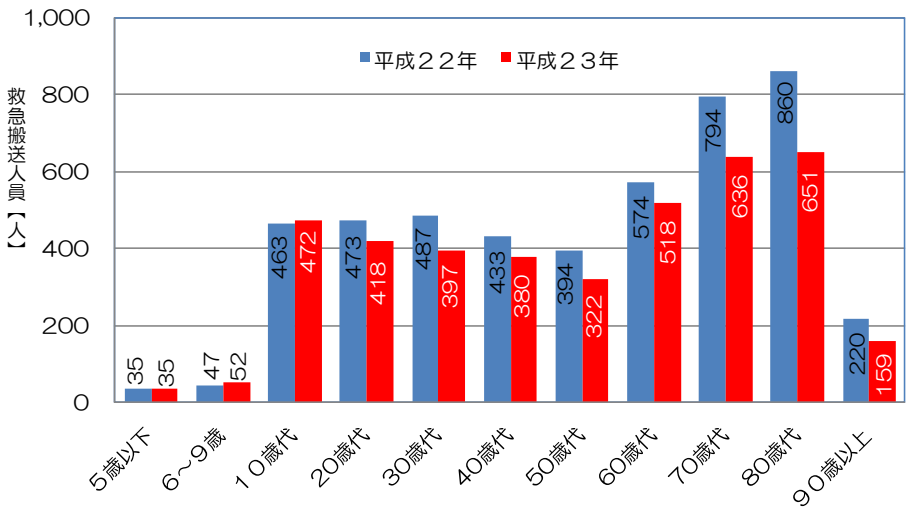

図６　年齢層別救急搬送人員

また、気温が２８度以上となった場合の、後期高齢者（７５歳以上）の熱中症の発生状況を見てみると、前年に比べ減少しています。時間あたりでみても１.１７人が１.０７人となっており８％減少しています（図７）。

なお、後期高齢者以外で特に特徴的だったのは、１０代の若い世代で、救急搬送人員は７人減少していますが、時間あたりでみると、０.３６人が０.４６人と、こちらは２８％増加しています（図８）。

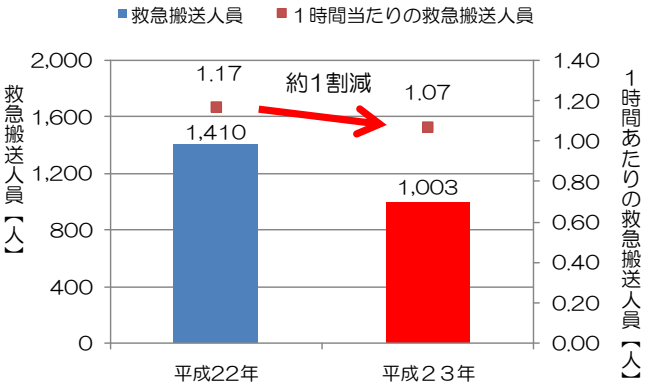

図７　２８度以上の時間帯における後期高齢者の熱中症の発生状況

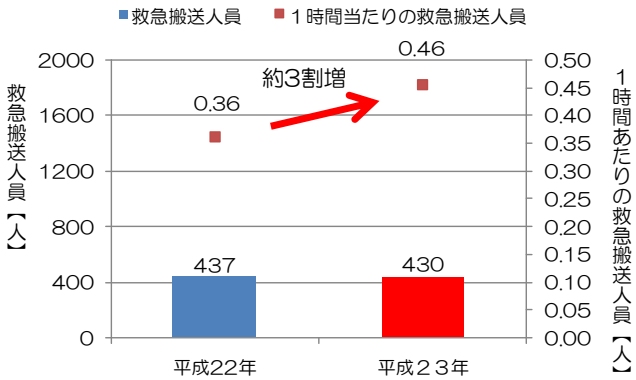

図８　２８度以上の時間帯における１０歳代の熱中症の発生状況

後期高齢者の救急搬送人員が減少した理由として、節電に伴う熱中症への注意喚起により、高齢者自身の意識向上が図れたこと、また、熱中症予防対策事業等の社会的対策が進んだことなどが考えられます。

結果　後期高齢者の救急搬送人員は減少したが、それでも約１０００人もの救急搬送があった

４　今年の熱中症の特徴は

一度に多数の傷病者が発生する事故が急増した

今年は、団体スポーツ中やマラソン大会等、運動の最中に、多数の人が熱中症と思われる症状で救急搬送されることが多く見られました（表３）。また、高校生や中学生などの若い人に多くみられる傾向にあることから、指導者等周囲の大人も注意する必要があることがわかりました。

表３　多数傷病者（５人以上）発生事案の比較

	事案数	救急搬送人員
平成２２年	１件	１１人
平成２３年	１１件	７９人

事例１：６月２９日（最高気温３４．３度）、台東区内のスポーツ施設において、高校の体育祭が実施されていたところ、女子高生１５人が熱中症の症状を訴え救急搬送された。

事例２：７月１５日（最高気温３３．７度）、昭島市の野球場で、応援をしていた女子高生９人が試合観戦後に体調の不良を訴え救急搬送された。

事例３：７月１７日（最高気温３２．９度）、小平市内でサッカーの試合が行われていたが、男子校生７人が体調の不良を訴え救急搬送された。

５　まとめ

今年は電力不足の影響も危惧され、熱中症に対する注意喚起がマスコミでも大きく報道されました。熱中症により救急搬送された人の情報と、当時の気温とをあわせて分析した結果、気温が上昇したときの熱中症の発生率自体は、昨年と今年で大きな変化がなかったことがわかりました。

一方で、救急搬送された人が若い世代に多かったにもかかわらず、危惧をしていた高齢者の熱中症救急搬送人員が減少したことについては、高齢者や高齢者のいる家族等周囲の方々が、室内での熱中症の発生に注意をしていただいた結果だと思われます。

東京消防庁では、今年の取組の結果を踏まえ、来年も熱中症による救急要請が増加し始める６月を前に、熱中症による救急搬送人員の減少を目指し、以下に示すようなさらなる注意喚起を行っていく予定です。

【熱中症予防のポイント】

１　節電に配慮しながらも、特に高齢者は熱中症に注意し、室内にいるときでも２８度をこえたら、風通しを良くしたり、工夫したエアコンの使用など、それぞれの家庭等で出来る対策で部屋の温度を下げる。

２　高温時に運動等を行う際は、水分補給等の熱中症対策を入念に行うとともに、学校の指導者など周囲の人も、熱中症予防、熱中症発生時の対応等、熱中症に備えるよう訴える。